

学習院アーカイブズ ニューズレター

13

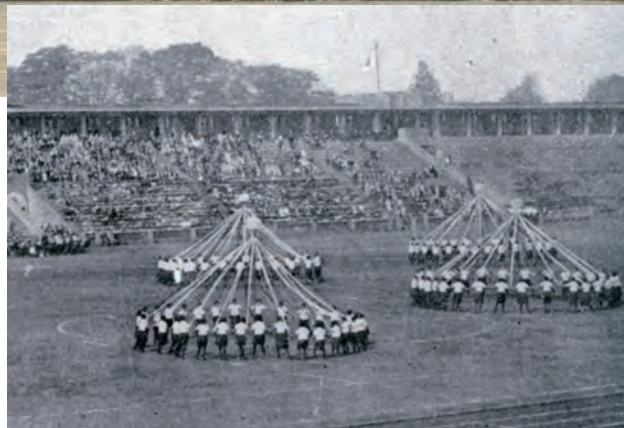
Gakushuin Archives Newsletter 2019.2.20 vol.



女子学習院開校五十年記念体操会 記念撮影
昭和10（1935）年11月18日（明治神宮外苑競技場）

開校五十年記念行事の最後に、明治神宮外苑競技場を貸し切り
体操会が催された。演習（プログラム）終了後に行われた学生
と教員総勢約800名の記念撮影。

右写真は、演習の一つ「メイポールダンス」の様子
（※関連記事：7頁）



Contents

「建学の精神」を求めて —アーカイブズ探訪記— 大学院アーカイブズ学専攻 准教授 下重 直樹	2
学習院に生き続ける前川國男の建築 前川建築設計事務所 元所員 星野 茂樹	4
スポーツの聖地で学ぶ	7
主な活動（2018年6月～2019年1月）	8

「建学の精神」を求めて

—アーカイブズ探訪記—

大学院アーカイブズ学専攻 准教授 下重 直樹



ある文部科学省の役人にいわせれば、学校教育なるものは「時代の政治的権力に裏付けられ」た「支配的イデオロギー」と密接不可分の関係にありⁱ⁾、その時々^たの社会情勢や政治体制の影響から逃れられない宿命を負っているらしい。昨今の入試制度改革論議や高等教育の無償化など、「教育再生」を掲げる政府により次々と打ち出された施策への対応が迫られるなかでも、画一化と運営費交付金による「締め付け」の厳しい国立大学法人に比べれば、私立の学校法人にはまだ多少の自由が残されているのかもしれない。

いうまでもなく、私立学校にはその「特性」にかんがみたる自主性の尊重が法によっても保証されている（私立学校法（昭和24年法律第270号）第1条）。この「特性」なる概念は、他の学校法人との差異を強調するための“Identity”として拙く読み替えられてしまうことも多いけれど、本来は法人としての“Characteristic features”ないし“Constitution”として捉えるべきものであり、一般には「建学の精神」という言葉でいい慣わされている。

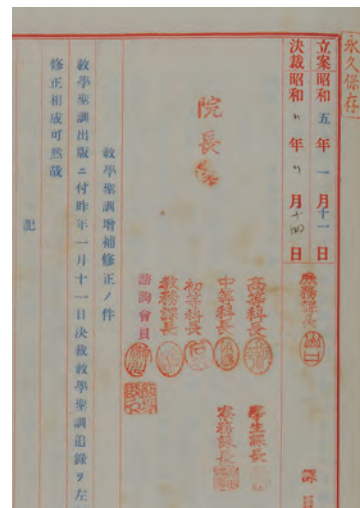
わが学習院でも、例えば大学では「精深な学術の理論と応用とを研究教授し、高潔な人格及び確乎とした識見並びに健全で豊かな思想感情を有する、文化の創造発展と人類の福祉に貢献する人材を育成すること」をホームページに「建学の精神」として掲げてはいるが、必ずしもこれを積極的にアピールした経営がなされている印象はない。この種の文章は往々にして外連味^{けれんみ}たっぷりの「創られた伝統」に陥ることもあるから、まことに控えめでお上品な対応であろう。

ところで、我々がいただく「建学の精神」はどこから生み出されてきたものなのだろうか。学習院の教壇へと移ってまだ2年目の新米教員として、その淵源を探っておくことは無意味でもあるまいと、懐かしい古き文書の薫りに誘われて「学習院アーカイブズ」を訪問した。

戦前期、宮内省所管の官立学校時代の「例規録」を手繰っていると、学習院が明治25（1892）年2月に作成した『教学聖訓』なる印刷物をたびたび増補・刊行していたことがわかる記録に出会った。『教学聖訓』は、明治4年以来華族や学習院が下賜されてきた勅語・令旨^{りょうじ}などから教学に関わるものを編さんしたもので、修身の教材として使用されたほか、「学習院の教学の基準」を示すものとして教員には就任時に院長から手渡されたものらしいⁱⁱ⁾。



『教学聖訓』（昭和15年）
表紙と「例規録」
（昭和5-6年）の一部



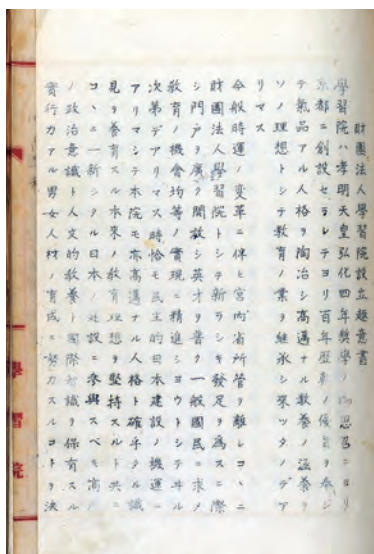
編さんを命じたのは明治21年11月に院長へ就任した三浦梧楼^{こうろう}であった。三浦の回顧録にはその詳しい経緯は記されていないが、歴史上の存在として「神武天皇」と敬称なしで記した文部省編さんの教科書を問題視し、いちいち敬語を加えるように指導するなど、「特殊の学校」としての学習院のかたちにあった教育を追求したエピソードがその辺りの事情をうかがわせるⁱⁱⁱ⁾。すなわち、文部省管轄の「一般の学校」とは異なる「特性」を眼に見えるかたちで表現することを目指したものが『教学聖訓』であったといえよう。

また、各教室のいたるところに額面にして掲げてあった「勅諭とか教訓とかいうもの」がしま込まれていたのを「言語道断」として叱正し、再度掲示

させたというから大変である^{iv)}。『教学聖訓』に引用された勅諭などの一部は、現在は大学図書館の貴重資料として丁寧に保存されていると承知しているが、泉下の三浦の怒声は聞こえて来まいか。

さて、『教学聖訓』は戦前期を通じて増補を繰り返して、いわば「建学の精神」として機能していたわけであるが、敗戦を経て「不死鳥」の如く甦った新生学習院においても、その「伝統」は完全に無視され、弊履の如く打ち棄てられることはなかった。

「学習院アーカイブズ」が所蔵する財団法人認可申請書（昭和22（1947）年3月認可）の控えに「財団



「財団法人学習院設立趣意書」冒頭部分

法人学習院設立趣意書」が綴られているが、ここでも幕末の京都学習院の創設より、「歴朝ノ優旨ヲ奉ジテ気品アル人格ヲ陶冶シ高邁ナル教養ノ涵養ヲソノ理想トシテ教育ノ業ヲ継承シ塚ツタノダアリマス。本館時運ノ更革ニ伴ヒ官内省所管ヲ離レロハニ財団法人学習院トシテ新ラシク發足ヲ爲スニ際シ門アリテ廣ク開カシ英才ヲ普ク一般國民ニ求メテ教育ノ機会均等ノ實現ニ精進シヨク一般國民ニ求メテ次弟デアリマス。時恰モ民主的ノ日本建設ノ機運アリマシテ本院モ亦高邁ナル人格ト確立スルニ決コトシテ本院ノ教育理想ヲ堅持スルニ決コトシテ本院ノ政治意識ト人文的教養ト國際的視野トを備ヘテ高邁ナル實力アル男女人材ヲ養成シテ國を榮光スルニ決

は、翌年7月に提出された大学科の設置認可申請書でも貫かれた。その「設置要項」には「創立百余年の伝統を生かし、高潔なる人格、健全にして豊かな思想感情を培い、同時に高級な理論的知識及び教養を涵養し、理論の究明と実践により「人類と社会に奉仕する人材を育成すること」が大学科の目的および使命として記された。現在の「建学の精神」にもつながる発想が、創設以来積み重ねられてきた「伝統」と時代に合わせた発展の上に立脚していることがアーカイブズの記録を通じて確認できたことは一つの収穫であった。

そもそも記録は、組織の構造や成り立ち、その活動によって生み出された存在であり、組織の「特性」はここに端的に映し出されてくるものである。ところが、日本の学校法人で記録・アーカイブズを適切に保存・利用できる仕組みを整えているところは、必ずしも多くはない。さきに紹介したような法人認可申請書や大学設置認可申請書の類は、文部省で処

理された後に国立公文書館へ移管されて利用に供されているが、意外にもニーズが高い資料群の一つとなっている。これは多くの学校法人が自校史を編さんする際に、戦災や戦後の記録管理のマズさから資料が残っていないがために、所管省庁に提出したものを参照せざるを得ない事情に起因している。



国立公文書館が所蔵する学習院に関わる認可書類

幸いにも学習院においては、百年史や大学五十年史編さんにあたって自分たちが管理してきた記録を使うことができたわけであるが、もしそれらの記録が散逸してしまっていた場合、公文書館への移管や公開のタイミングが合わなければ、自らの組織が歩んできた過去を直視する機会を失いかねない。「特性」に応じた自主性を存立基盤とする私立学校にとって、その意味は決して小さくはないだろう。

今日の「学習院アーカイブズ」の中核をなす資料群の多くは、実は戦前の官立学校時代の記録管理システムによって生み出され、保存されてきたものである。戦後は記録管理のルールが定まらず、体系的な仕組みが整い始めたのは近年のことであるという。かつては着実に記録を残す「伝統」があったとしても、いつまでもそのような僥倖の産物にすぎることではできないのであり、自らの「特性」を跡付ける記録・アーカイブズを基点として、新たな「伝統」を生み出すことが必要なのではないだろうか。

i) 前川喜平「文部省の政策形成過程」(城山英明・細野助博編『続・中央省庁の政策形成—その持続と変容—』2002年、中央大学出版部)。
ii) 学習院百年史編纂委員会『学習院百年史』第1編(1981年、学習院) 231～234頁。
iii) 政教社編『観樹將軍回顧録』(1925年、政教社) 253～254頁。
iv) 同上、251～252頁。

学習院に生き続ける前川國男の建築

前川建築設計事務所 元所員
建築アトリエ主催 星野 茂樹



1. 学習院大学とル・コルビュジエ

上野の国立西洋美術館を始め、一連の建築作品により世界遺産に指定された20世紀の巨匠建築家ル・コルビュジエ、実は学習院大学と深い関係があります。

1958年、政経学部研究室棟と理学部教室棟の建設が計画され、14名からなる学習院大学建築委員会が発足しました。そこで「各建築を別個に考えるのではなく、総合計画として実施する方向」が固まりました。メンバーの一人である文学部長「富永惣一教授（1959年にはル・コルビュジエが設計した国立西洋美術館の初代館長に就任）の友人である前川國男にお願い」することになったようです。^{*1}

富永先生は学習院の教授に就任後、欧米に留学、東京帝国大学文学部美学美術史学科で同級生であり、ル・コルビュジエに師事した坂倉準三氏に紹介され、ル・コルビュジエと会った経験があったようです。その縁もあってか、ル・コルビュジエのアトリエで最初の日本人として学び、帰国後多くの建物を手掛けて名声を上げ、富永先生の知己でもあった前川に、学習院の建物の設計が依頼されました。

1960年にはキャンパスの中心となる3棟の校舎と本部棟が完成。それは中世の伽藍をイメージし、ピラミッド校舎を中心として配置された建築群でした。師であるル・コルビュジエが来日した際、よい計画だと前川を褒めたとの話です。



当時の写真（1961年 学習院大学卒業アルバムより）
左上の建物：北1号館、右上の建物：南2号館

2. 前川が過ごした建築界の状況

前川が建築を学び、学習院の設計をするに至った時代背景を述べてみましょう。前川は1928年3月、

東京帝国大学工学部建築学科を卒業したその日の夜に、シベリア鉄道に2週間程乗ってフランス、パリのル・コルビュジエのアトリエに向かいました。建築史に於いては、この日が日本の現代建築の幕開けとも言われています。

前川の学生時代、1923年に関東大震災が起こった後で、学科内では構造学系が優位な時代でした。「デザインごときは婦女子がするもの、男子たるものは構造に勤しむべし」と当時の重鎮である佐野利器教授の発言はよく知られています。

また、その少し前の時期、1903年にベルギー人のオーギュスト・ペレという建築家がフランスで鉄筋コンクリートの建物を初めて建設しました。歴史のある鉄骨構造に対して、新たに鉄筋コンクリート構造が台頭してきた時代でもありました。

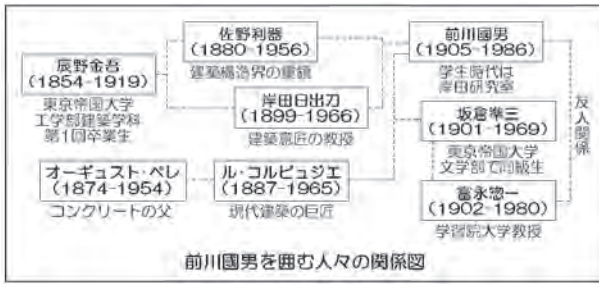
佐野教授に構造を学ぶように指導した辰野金吾先生は、鉄骨レンガ構造を得意にして設計活動をしていました。佐野教授が構造設計を担当し、1914年に完成した東京駅の設計では、鉄筋コンクリートも検討されたようですが、まだ一般的でない上に「水と混ぜて固まるような建築材料は信頼出来ない」との辰野先生の考えにより採用されなかったと聞きます。ただ、震災後にはその防火性能が注目され、その後、佐野教授は鉄筋コンクリート構造学の権威となったのです。

そうした構造学派優位の状況下、前川は建築意匠系の岸田日出刀教授からル・コルビュジエ著『装飾と芸術』（フランス語版）を渡され感銘を受けたようです。オーギュスト・ペレのもとで修行、鉄筋コンクリート建築により新たな展開を目指すル・コルビュジエのアトリエで学び、日本にその建築デザインを持ち込むことになりました。岸田教授は前川及



前川國男とル・コルビュジエ
(写真提供：前川建築設計事務所)

び後輩の丹下健三氏といった弟子達に、戦後、復興する日本各地の市庁舎等の設計をする機会を与えていったのです。



3. 前川建築に見られる建築工法の変遷

近年では多くの建築作品にコンクリート打放しが採用されていますが、日本で最初に建築作品に用いたのは前川です。古代ではローマのパンテオンにコンクリートは使われましたが、圧縮力は強い反面、引張力が弱い欠点がありました。20世紀になり、鉄筋と熱収縮率が近く、一緒にすることで鉄筋に引張力を負担させる新たな建材として注目され、前川も表現材として建築に使用したのです。

また、戦後間もなく建築技術の発展前夜に、製品の質を上げ、大空間を創出すべく、建材を工場で作成現場で組み立てるPC工法にも挑戦しています。更に晩年には建物の耐久性に鑑み、タイルの落下がないように打込みタイルの工法を生み出しました。

戦後復興の中、新しい時代を目指し、葛藤の中から誕生した建築工法による様々な表現の変化や多様な空間を、学習院目白キャンパス内の建築に見ることが出来るのです。



打放しコンクリートの北1号館（2012年改修竣工図書より）



一部床梁にPC工法を採用した大学図書館



打込みタイルの南5号館（竣工時）

4. 前川建築に使われる拘りの色

前川は建築の設計について、多くを語ることは少ないのですが、建築に使う色については、自ら現場に赴き、あまたの名言と共に、絶対的な自信を持って特徴ある色を施していきました。

東京海上本社ビルに於けるPCタイルの色を「かちかち山のたぬきのやけど色」^{*2}と言いつたり、東京文化会館の椅子の張地選定に際しては「女の人が寒空に立っていたため唇が少し紫色になった時のようなワインカラー」^{*3}と語ったといひます。

また、熊本県立美術館の壁の色では「有明海に沈む夕日の空の色」と表現したそうです。この現場では、壁に塗った塗装の色に対して、前川があれこれと注文を付けたため、現場担当者と塗装の職人さん達と一緒に、実際に有明海まで確認しにわざわざ出掛けたとのエピソードまであります。

その他に「ベンガラ色」と言われる「赤」、天井にしばしば使われ「成層圏ブルー」と語られる空の「青」等いくつかの色は多くの建物によく使われ、前川建築に豊かな彩りを与えています。学習院の建物にもそうした個性溢れる色使いがされた空間を、随所に発見することが出来るでしょう。

5. 学習院における前川建築の現在と今後

1960年の校舎群竣工以降、前川存命中には戸山の女子大学キャンパスも含め、いくつかの建築が作られ続けました。前川が他界した1986年以降においても、弟子たちにより現在に至るまで、継続して建物の建設が続いています。

前川建築の北1号館は2012年に、また南2号館は2015年に改修工事があり、既に筆者は事務所を離れていましたが、学習院の仕事を継続的に続けている事務所OBの原田忠弘氏から誘いを受けて、いずれも計画に携わりました。

この2つの建物について改修工事に至るまでの経緯を説明します。建設後約半世紀が経過して老朽化が進む中、解体か保存かの判断が迫られていたのです。そこで、建物の構造強度を確認すべく、耐震診断を実施した結果、建物は建設後50年以上経過して

いたにも拘らず、コンクリートも含め十分な強度があることが判明。構造補強は不要との結論になり、北1号館及び南2号館は解体されずに改修して、新たな機能も付加されて保存されることになったのです。

改修に際しては、構造補強不要との要因ともなったX型に配置された梁を、室内に表現するデザインを一部に採用しています。大教室及び多目的教室では天井の高さを改修前より高くしたため、広い空間の教室に生まれ変わりました。



梁型を見せた多目的教室（北1号館）

建物の色使いに関しては前川の色を再現という考えもあったものの、全て前川に成り代わって色を示すことは難しいと判断。建築空間の中での色使いの意図を尊重する方針を掲げて色彩計画に挑みました。

皇室と縁のある学習院の沿革から着想を得て、奈良県明日香村で発掘されたキトラ古墳の壁面に纏る色を使うことにしたのです。中国の四神神話から引用される東の青龍、南の朱雀、西の白虎、北の玄武の四色を建物の4つの階に割り当て、その特徴ある色により自らの位置を認識しやすい空間にしています。



赤を基調とした階段ホール（北1号館）

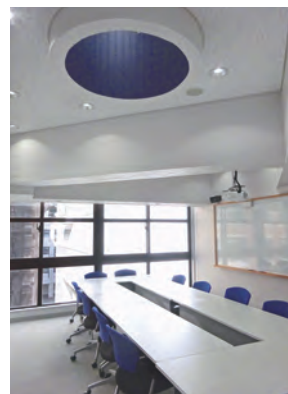
南2号館は、エレベーターが計画されていない竣工時の状態のままだったので、時代の要請にも従い、新たに、シースルーの円形エレベーターを設置しました。各階の色使いは北1号館を概ね踏襲する中、一部の天井に、青い空を連想させる前川の「成層圏ブルー」の再現を試みています。



新たに円形エレベーターを設置（南2号館）



屋上（南2号館）



4F 会議室（南2号館）

今でも、前川生前の建築が目白には5棟、戸山には3棟残っています^{※4}。現在、前川建築設計事務所は学習院女子大学1号館の設計に着手しており、筆者も加わり2020年には完成する予定です。



中央は戦後最初の前川國男建築設計事務所の所員で、学習院大学を担当した窪田経男氏、右は原田忠弘氏、左は筆者

※1 『学習院大学五十年史、上巻』（2000年）より引用、一部加筆
 ※2、※3 『前川國男・弟子たちは語る』（2006年 建築資料研究社）より引用

※4 学習院内 前川國男建築一覧

竣工年	地区	建物名	現在の名称
1960年(昭和35年)	目白	ピラミッド型大教室(中央教室)	※現存しない
1960年(昭和35年)	目白	政経文学部棟	北1号館
1960年(昭和35年)	目白	理学部棟	南2号館
1960年(昭和35年)	目白	本部棟	※現存しない
1963年(昭和38年)	目白	大学図書館	大学図書館
1982年(昭和57年)	戸山	女子部 戸山図書館	戸山図書館
1983年(昭和58年)	目白	南5号館(大学計算機センター)	南5号館(大学計算機センター)
1985年(昭和60年)	目白	男子高等科 部室	男子高等科部室
1986年(昭和61年)	戸山	女子短期大学 厚生施設	女子大学3号館(互敬会館)
1986年(昭和61年)	戸山	女子短期大学 厚生施設	女子大学部室棟

前川國男 1905年(明治38年)5月14日～1986年(昭和61年)6月26日

スポーツの聖地で学ぶ

今号の表紙で紹介した集合写真は、現在、2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックに向けて建設を進める国立競技場、まさにその場所で、今から84年前の昭和10(1935)年に撮影されたものです。

大正7年より昭和20年まで、女子学習院は青山の地を学び舎とし、明治神宮外苑野球場の南側に位置していました。(現在の秩父宮ラグビー場右図参照→)



明治神宮外苑平面図
 (『明治神宮外苑奉獻概要報告』大正15年より)
 左下が女子学習院、
 左上が明治神宮外苑競技場

女子学習院の校舎から歩いて5分ほどの距離に、明治神宮外苑競技場があり^{※1}、昭和10年は女子学習院開校五十

年の記念すべき年であったために、その年の春の大会から、この競技場を使用して体操会を開催しています。この競技場は、全国的な明治神宮競技大会や、極東選手権大会などの国際大会も行われる大規模スタジアムでしたので、記念の体操会には来賓・父母等約2,000名の来観者もあったとはいえ、学生数約800名の会をこの場所で行う光景は、とてもダイナミックに感じます。そして、この競技場使用は開校五十年記念の年だけでなく、その後も女子学習院では主に春の体操会において、昭和18年までに8回行われています^{※2}。恵まれた環境の中に学校が存在していたとも言えます。

特にこの開校五十年記念の秋の体操会では、周到な準備が繰り返さされており、その様子が「式事録」^{※3}の記録に細かく残されていますが、記録の端々に、会の開催に向けての緊張や期待、そして責任を感じ取ることが出来ます。

「体操会」とは、華族女学校時代から学習院女学部時代にかけて行われた運動会が^{※4}、大正6年に体

操会の名称のもとにその一部を復活することになったもので、復活当初は小運動会とも言うべきものでした。第1回の運動会を開催した華族女学校四代校長の細川潤次郎(任期:明治26年~明治39年)は、「体育を徳育・知育と並べて尊重し、特に華族上流女子の健康増進に就ては最も深く意を用ひ、教育理想の一として大いに之を重視し盛んに奨励を加へたり」(『女子学習院五十年史』(昭和10年))とされており^{※5}、これは現在の女子中・高等科にも見られる、心身の健全な成長を促す数々の行事へと繋がる太い流れとなっています。

11月の約1週間をかけて開校五十年記念式典を行い、他にも盛大な学芸会や展覧会も開催していますが、最終日の11月18日にこの整備された大きな競技場を会場として体操会が開かれ、その後も継続されたこと、また写真に写し出された生徒達の生き生きとした表情と身体の動きなどから、体育教育を重視したのびやかな指導を感じます。

いつの時代にも、健康な身体とゆとりある精神は、大きな力を発揮する原動力となることでしょう。



昭和16年5月体操会
 60米競走(初等科五六年)

注)

- ※1 竣工は大正13(1924)年、国立競技場建設のために昭和32(1957)年に取り壊された。
- ※2 女子学習院が家庭との連絡のために発行していた小冊子『おたより』の記述による。
- ※3 主に卒業式等の式典、皇族による授業参観の記録が綴られた簿冊。
- ※4 体操会以前の運動会は、明治27年より明治41年まで開催。
- ※5 荒井啓子「華族女学校の女性スポーツ教育」(本誌第10号)に関連記述あり。



絵葉書「機上ヨリ見タル明治神宮外苑全景」(新大東京名所)
 (提供:東京都立中央図書館)
 野球場手前の敷地が女子学習院の校舎・校庭

(学習院アーカイブズ 近藤)

主な活動 (2018年6月～2019年1月)

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②各部署で保存期間満了となった文書ファイルの評価選別 (8部署)

◆文書・資料の調査・整理及び目録作成

- ①初等科所蔵資料の調査・整理 (7月、12月)



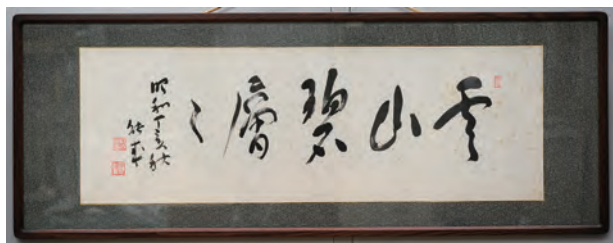
- ②アーカイブズ所蔵史資料・刊行物の再整理・目録修正

◆史資料のデジタル化・修復等

- ①「土地建物録」(明治19～39年・8冊)のデジタル化
- ②戦後初期酸性劣化文書の修復 (継続)
- ③大学卒業アルバム(昭和46～49年)のデジタル化
- ④施設課移管校舎図面の一部デジタル化
- ⑤自動演奏ピアノの維持管理、秋田県立博物館所蔵自動演奏ピアノの調査

◆史資料の受贈・購入

- ①安倍能成額書「雲山碧層々」



- ②輔仁会文化祭・演奏会・演劇公演パンフレット、聴講届ほか
- ③昭和8年高等科卒業記念写真帖
- ④大学図書館所蔵文書・写真
- ⑤講義ノート、初等学科修了証ほか
- ⑥学習院女学部卒業記念写真 (大正7年)

- ⑦『輔仁会報』創刊号(昭和19年)、山梨勝之進書簡ほか
- ⑧女子学習院教授旧蔵文書・写真
- ⑨安倍能成書簡(昭和37年、幼稚園開設について)

◆講演会・教育支援・広報支援等

- ①大学史料館秋季特別展「学び舎の乃木希典」への協力・史資料貸し出し
- ②「華ひらく皇室文化—明治宮廷を彩る技と美—」展への資料貸し出し(名古屋・秋田・京都での巡回展示)
- ③国立近現代建築資料館企画展「明治期における官立高等教育施設の群像」への写真提供
- ④宮内庁資料調査・収集への協力(女子中・高等科所蔵史資料の調査・撮影)
- ⑤国立公文書館「アーカイブズ研修」での施設・所蔵資料紹介(9月)
- ⑥学習院アーカイブズ講習会の開催「文書の管理と保存がなぜ必要か—記録を残し、未来に伝え、活用する—」(12月4日)



◆その他

- ①全国大学史資料協議会全国研究会・東日本部会研究会への参加、東京藝術大学(8月)、九州大学(10月)、立教大学(1月)

学習院アーカイブズ・ニュースレター第13号
2019(平成31)年2月20日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285(直通)
事務室 西5号館(本部棟)地下1階
<http://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>